〔書　評〕

佐藤　亨著『近世語彙の歴史的研究』

鈴木英夫

本書は、近世の語彙、特に漢語を取上げて、その源流や意義・用法、現代語との関連などについて綿密に調査し、考察を施したものである。本書によって、近世の語彙研究は、一段と深められたといえよう。

本書の内容と特色については、佐藤喜代治博士が本書のために書かれた序文に要領よくまとめられているので、それをもとに紹介することにしたい。

まず本書の内容からみていくことにする。佐藤博士は「初め、著者は仮名草子の中の漢語について探究を進めたが、岩手医科大学在任中は、医学に関連のあることばに興味をもって、その究明に努めた」（序）と述べられているが、正鵠を得た言である。

本書の構成は、

Ⅰ　序説
第一章　近世語彙研究の意義と課題
Ⅱ　近世漢語論
第二章　近世の漢語の語義について(1)――仮名草子における漢語を中心に――
第三章　近世の漢語の語義について(2)――仮名草子における漢語、特に仏典に見出される語を中心に――
第四章　近世の漢語の語形――仮名草子にみられる二字漢語を中心に――
第五章　近世の二字漢語サ変動詞について
Ⅲ　近世語の通時的研究
第六章　近世の漢語についての一考察――「療治」「治療」をめぐって――
第七章　「リコン」（利根）と「リコウ」（利口）について
第八章　キレイの語誌
第九章　「文法」の語誌
第十章　「景気」とその周辺の語
第十一章　「凍る」の類義語の歴史
第十二章　「アカギレ」・「ヒビ」の語史
Ⅳ　近世訳語論
第十三章　「解体新書」より「重訂解体新書」へ――訳語の変遷――
第十四章　「重訂解体新書」の訳語
第十五章　「西説医範提綱釈義」の訳語

第十六章　「遠西医方名物考」の訳語
Ⅴ　訳語の成立
第十七章　訳語「病院」の成立――その背景と定着過程――
第十八章　「分娩」という語の定着
第十九章　「シャボン」から「セッケン」（石鹸）へ

となっているが、佐藤博士の言のように、本書の中心となる部分は、仮名草子の漢語を扱った「Ⅱ　近世漢語論」と、医学関係の訳語を取上げた「Ⅳ　近世訳語論」「Ⅴ　訳語の成立」である。

これらは、大部分既発表の論文であるが、一書にまとめるに当って幾分手が加えられている。一方、新しく書き下されたものは、第一章、第十八章、第十九章の三章である。また、巻末には語彙索引があって、検索に役立つ。

それぞれの語の性格や特色、意義・用法などを解明するに当っては、まず「漢籍仏典に典拠があるかどうか」（序）を明らかにし、次いで本朝の用例を挙げて比較検討し、国語語彙としての用法や特色を究明するというやり方がとられている。これは、佐藤喜代治博士が『国語語彙の歴史的研究』で示された手順と一致しており、佐藤氏は、それを受け継いでいると見ることが出来よう。氏の佐藤喜代治博士への傾倒ぶりは、随所に見られる。

また、近世漢語を取上げるに際しては、「あとがき」にもあるように、「現代語の源流を辿る」という観点からなされており、その点で本書は一貫している。

用例の蒐集に当っては、文字通り「和漢の資料を渉猟している」（序）といえる。まさに「博捜」ということばがぴったりで、ただただ感嘆するのみである。

次に、本書の全体について、問題となる点をいくつか挙げてみたい。

第一の問題点は、研究の対象とする語彙の選定の仕方である。研究の対象となった語は、いずれも近世漢語、あるいは訳語という枠の中から選ばれている訳ではあるが、それら相互の間の関連がいかにも薄いように思われる。一つの語の用法やその変遷を明らかにするに当っては、出来るだけ「関連あるいくつかの語を合わせ考え調べていく方法」（246ぺ）を取るということにはまったく賛成であるが、どの語を研究対象として取上げるかについても、互いに関連のある語を対象とするのが効果的であり、解明される点も多いのではなかろうか。その意味で、宮地敦子氏の『身心語彙の史的研究』のようなあり方が、もう少し参照されても良いのではなかろうか。「利根」「キレイ」「文法」「景気」「凍る」というように並べてみると、それらの語を取上げて研究しようとされた佐藤氏の意図が奈辺にあるのか、聊か了解に苦しむ。

用例の取り上げ方やその取り扱い方についても、幾分問題がある。たとえば、第六章である。この章は、本書の中でも力作の一つであり、「治療」と「療治」について、次のような点が解明されている。

・「療治」は漢訳仏典及び漢籍に古くからあるのに対し、「治療」は漢籍のみに見出される。
・漢籍では「療治」は古い語であるが、「治療」は比較的新しい。
・中国近世においては、「療治」は主に史書・随筆・俗伝に、「治療」は医書に用いられた。

・本邦では、「療治」が古くから多用されているが、「治療」はそれぞれの時代に僅かな例があるのみで、一般化するのは明治期以降である。
・「治療」が一般化したきっかけは、中国医学系の学者がこの語を多用したことにあると思われる。また、新奇な語に対する心理的な欲求も作用していたかも知れない。
・近世末においては、「療治」が一般通行語（話しことば的）であるのに対し、「治療」は文章語（書きことば的）であった。
・「治療」には、明治初期、呉音よみ（ヂレウ）と漢音よみ（チレウ）とがあったが、明治十年代の終り頃、漢音よみに固定したと思われる。
・明治初期以降、次第に「治療」が優勢になり、今日に及んでいる。

以上が第六章のあらましであるが、多くの資料を駆使して、見事に「治療」と「療治」の消長を描き出している。

ただ、明治初期から現代へいきなり飛んでしまった点に、いささか物足りなさを感じる次第である。「現代語の源流を辿る」ことを狙いとするのなら、せめて明治期の資料にもう少し当ってほしかった。近世語彙の研究であるから、必要ないといえばそれまでであるが、源流に言及し、今日の漢語とのつながりを考えようとするのなら、もう少し力を割いても良かったのではなかろうか。望蜀の嘆ともいえようが、明治期以降については身近な資料を使っても、ある程度跡づけをすることができるのである。

たとえば、「療治」が話しことば的であり、「治療」が書きことば的であることは、明治初期も同様で、『西洋道中膝栗毛』十編上（明治4年序）にも端的に現われている。ここでは、地の文に「治療」（1例）が、会話文に「療治」（4例）が使われ、その位相の差が歴然としている。

①良医に乞いて治療を受一時も疾く全快させんと……（2オ）
②すぐに療治をして下さるだらうけれど……（3オ）
③足を切ツテ療治をされちやアたまらねへ（5オ）
④どふか骨を折ツて療治をして一刻もはやく愈してやらう……（7オ）
⑤イヤうぬぼれとかさけが合併しちや療治もほねがらみになるだらう（11オ）

（名古屋大学教養部蔵本による）

その後大まかにいって、戯作調の作品には「療治」が、政治小説など硬い文章には「治療」が使われるという傾向が続く。

「療治」の例
⑥彼れは霍乱だから療治の仕方によってハ随ぶん助命ものです（『一読百笑明治浮世風呂』明治20年刊 32ぺ）
⑦医師に命じて療治を加へさせましたる所……（『吃驚仰天滑稽演説会』明治21年刊 40ぺ）
⑧小生などの藪医者の療治ハ……（『行成放題楽雅記』明治22年刊 128ぺ）

「治療」の例
⑨その傷を治療せんと獄医に請ふて……（『鬼啾々』明治17～18年 明治文学全集94ぺ）

⑩眼病の治療も名医の手を借りたれバ容易く癒て……（『癡人之夢』明治20年刊　130ぺ）

⑪直ちに医を迎へて両人の治療を托し……（右に同じ　189ぺ）

⑫近ごろ漸く治療を始め出した新開業医の……（『罪と罰』二巻　明治26年刊　明治文学全集238ぺ）

では、一体「治療」が「療治」より優勢になっていくのはいつごろであろうか。私自身は、明治20年以後と見ている。その根拠として、まず⑩に挙げた『癡人之夢』（須藤南翠作）における「治療」と「療治」の使われ方の違いが挙げられる。すなわち、単独では2例とも「治療」が使われているのに、「――代」という形を取る時には常に「療治」が使われている点である。

⑬彼方よりして療治代を償ひたる上……（190ぺ）

⑭療治代を自弁とし……（190ぺ）

この使い分けは、鷗外の『寒山拾得』（大正5年刊）にも見られる。

⑮どう云ふ治療ならさせる、どう云ふ治療ならさせぬと云ふ定見がないから……（鷗外選集　第五巻　188ぺ）

⑯療治代は戴きませぬ。」（189ぺ）

このことは、「療治」の勢力が後退して、単独では余り使われなくなり、専ら複合語や派生語を構成する場合に使われるようになっていくことを示しているものと考えられる。

また、前に拙稿（幕末明治期における新漢語の造語法　国語と国文学　昭和53年5月号）でも指摘したように、『浮城物語』（明治23年刊）に「治療」（30回）という表記が見られることも、「治療」が次第に優勢になってきたことを示すものとも言えるのではなかろうか。「れうぢ」が振り漢語として用いられたのは、一つにはそれが日常語的であったためであろうが、「治療」が主、「療治」が従という傾向の現われともみられよう。

なお、佐藤氏が、「チレウ」から「チレウ」へ移行したのが明治十年代の終り頃とされたのは、正しいと思う。佐藤氏は、そのことを『和英語林集成』や『言海』における見出し語の形をもとに推定しておられるが、同じことは、新聞を資料としても言える。ざっと見たところでも、朝日新聞では、明治12年2月6日号では「治療」とあるのに対し、明治20年7月1日号では「治療」になっている。

第十七章の、「病院」という語の成立についても、鈴木博氏から疑義が提出されている（『病院』は和製漢語か」、国文学攷第86号）。『紅毛雑話』にある「明人」を、佐藤氏が「一応玄沢らとし」（382ぺ）たのに対し、鈴木氏は「明末に中国で活躍したイタリア人のイエズス会士」という推定をしている。同じ資料に対して、異なる見解が提示されている訳である。佐藤氏は、追記（401ぺ）で「『明人』を蘭学者と必らずしも断じえないこと、また中国の洋学書を十分調べていない今、『病院』が日本でつくられたと言い切れないことなど問題は残る」と述べておられるが、鈴木博氏の論考は挙げられていない。「国文学攷第86号」は昭和55年6月30日の刊行であり、鈴木氏はそれ以前にも、2月に朝日新聞の「研究ノート」欄に同じ趣旨のことを述べておられる。佐藤氏もお読みになっていた筈である。賛成するか否かは別として、一応言及するのが礼儀ではなかろうか。

次に問題となるのは、日葡ないし日仏辞書の引用の仕方である。日葡でなく日仏に拠るのはともかくとして、その解釈に問題がある場合がいくつか見られる。207ページの用例⑪の日葡辞書の語釈につ

いては、福島邦道氏からの教示があった旨補注（221ページ）に示されているが、それ以外で挙げてみると、キトク（60ページ）が問題になる。日仏が引かれて、

Kitocou, キトク Bonne récolte ou moisson nouvelle.（以下略）

とあるが、récolte も moisson も「収穫・刈入れ」の意であって、キトクは「収穫や取入れが豊かであること」を意味するものと思われる。この語が「すぐれていること又は珍奇」（60ページ）であるとされるのは何によるのであろうか。この「キトク」は、「キドク（奇特）」とは別の語と考えるべきであろう。

「古語」が日葡に「格言又は昔の人の言葉」（36ページ）と記されているというのは、何によるのであろうか。「格言」とか「又は」に当る語は見当らない。

Cogo. Cojinno go. Sentença de algũ antigo

「首尾」についても、「始めと終り、計画」（40ページ）とあるうちの、「計画」が何にもとづく訳なのか、私には分らない。

Choubi, ヂュビ Tête et queue, c.-à-d. commencement et fin.

「無体」の訳の中の、「不吉なこと」（64ページ）も、理解に苦しむところである。「凍ツ」の訳（254ページ）も正確でない。

ほかにも問題となる訳がいくつかある。これらは、確かに推論の上ではほとんど差支えない誤りであるが、引用するからには、きちんと訳すべきではなかろうか。

誤植もかなり目立つ。中でも、引用したポルトガル語や英語の綴りに誤りが多い。たとえば、83ページの表の中にも、次のような誤りがみられる。下が正しい綴りである。

一定　Ichijiǒ→Ichigiǒ
強力　Gŏriqui→Gŏriqi
軽重　qeŏgiũ→Qiŏgiũ
孝養　Qeóyŭ→Qeóyŏ

82ページから101ページまでの表にあるものを除いて、綴りの誤りをみると、次のようなものである。

souru→sourou（61ページ）　mezinbas→mezinhas（143ページ）
fubou uo→fubon（188ページ）uo　Kireizouk→Kireizouki（188ページ）
suru→szru（194ページ）　UTSZKUSHI→UTSZKUSHII（194ページ）
comosition→composition（215ページ）hito→h'to（235ページ）
conglarse→Congelarse（251ページ）VI→Vt（275ページ）

そのほか、大文字にすべき所が小文字になっている所や、「・」と「.」とが違っている所などかなり多い。266ページ Par も小文字でないとおかしい。68ページの「Nojou」の引用文には、

テンノ　ゴナイショウニ　カナイ　タテマツルヲ　イユ。

がない。意図的に省いたのであろうか。

また、

「伊曽保物語」に、

(54) Xicaruni xuroua qenjitno riocôno gotoqu cocorozaxiuo cuda sazu（文禄二年耶蘇会板472頁）

の如く「リコウ」がみえ、「天草本伊曽保物語」（井上章氏）でも同様である。（164～165ページ）

とある部分も理解に苦しむ。「文禄二年耶蘇会板」伊曽保物語と「天草本伊曽保物語」とは同じものであり、本文に違いがあっては困る

のである。

日本の資料の扱い方では、「ココヒタリ」に問題がある。249ページに「コユは上二段に活用していた語であるが、下二段活用の語にコゴユがある。それは例6『ココヒタリ』である。」とあるが、「例6」にはみられない。「例7」の誤りと思われる。その例7は、

7　凍コホルコ、ヒ　タリ　コル　シミナ　サムシ　サユ—死カンカル

となっているが、「ココヒタリ」が「コ、　ヒ　タリ」となってしまっているので分りにくい。この部分は、名義抄では、

凍　東・凍二コホリ　コル　サムシ　サユ　—死カンカル
コ、ヒタリ・通凍字　シミナ　コイタリ

となっている。引用の仕方にも問題があるが、この箇所の誤植は、読者をかなり混乱させるものと思われる。また、下二段活用の「コゴユ」の例が「ココヒタリ」とするのは如何であろうか。「ココヒタリ」なら上二段活用になるのではなかろうか。

そのほかの誤植を挙げると、44ページの「者しびりでござらう」の「者」は不要である。「太平記」(55ぺ)は「太平記」、「勇心(いきむ)」(159ぺ)は「勇心(いきむ)」、「あつけるる亭主」(165ぺ)は「あつけたる亭主」の誤植である。174ページの「リコンは鎌倉期ごろから語義が拡大され」は、「リコウは……」となるべき所ではなかろうか。また、252ページのの「36～38如く」は、「37・38の如く」ではないかと思われる。277ページに「図の如くになる」とあるが、このままでは分りにくい。これは「270ページの図の如く」とした方が親切である。321ページに「仕立直して用いたことが知られる」[11]とある、注[11]は324ページには見当らない。誤植が多いと、とかく論文の内容まで低く評価されがちである。せっかくすぐれた内容の論文を集められたのに残念である。校正が十分でなかったのだろうか。

また、サ変動詞としては、現代使わぬ語として、114ページに「狂乱」「上下」も挙げられているが、これらは『岩波国語辞典』初・二・三版ではサ変動詞としても使う旨記されている。115ページには『現代雑誌九十種の用語用字(3)』と『岩波国語辞典』によって認定したとあるが、この場合の認定はどのようになされたのであろうか。

いろいろ注文をつけたものの、本書が綿密な調査に基づく優れた論考であることは、誰しもが認めるところであろう。語彙の研究は、こうした緻密な研究を積み重ねることによって、少しずつ前進していくものである。本書が学界に稗益する所は誠に大である。私自身、蒙を啓かれた点が少くない。

論評するに当っては、私自身の関心や興味にひきつけすぎた嫌いがないでもない。また、浅学のため見当違いの評や読み違いもあろうかと思う。御宥恕を賜わりたい。

〔付記〕　本稿成稿後、古田東朔氏から有益な御助言を賜わり一部書き改めた。記して謝意を表する。

（昭和五十五年十月二十五日発行　桜楓社刊　A5判　一八〇〇円　四六八ページ）

——名古屋大学助教授——